

東京音楽大学

論文作成の手引き

2025年3月改訂版

音楽文化教育部会 編

論文の書き方にはさまざまなスタイルがあり、それぞれに長所・短所や特徴があります。しかし、一つの論文の中ではある一定の書式を選び、終始一貫してそれに従いながら全体をまとめる必要があります。

この手引きでは、音楽に関わる卒業論文、修士論文、博士論文を作成する際★に必要なと思われる基本的な事項、すなわち論文作成の準備に必要な手順と執筆する際の注意点や書式の例をまとめましたので、参考にしてください。

音楽文化教育部会  
改訂版編集協力 A.S.

★卒業論文、修士論文、博士論文以外で学内・学外に投稿する論文の場合には、異なる書式が指定されている場合があります。それぞれの投稿規定に従って、論文を作成してください。

# 目次

<b>A. 準備から執筆まで——音楽研究入門</b>	
I テーマの設定	1
II 基本概念の調査と理解	1
III 資料の収集	1
IV 調査と分析	4
V 資料の読み込みと整理・執筆	5
<b>B. 執筆上の注意</b>	
I 論文用紙	6
II 表紙	6
III 提出原稿	6
IV 枚数	6
V 構成	6
VI 文字、各種の記号	7
VII 人名などの表記	7
VIII イタリック体の使い方	8
IX 出典の明示	8
X 他の研究との関連付け	9
XI 注	10
XII 参考文献表	10
<b>C. 参考文献の表記法</b>	
I 書籍	13
II 論文	15
III 事典項目	16
IV 楽譜	17
V AV資料	18
VI インターネット	19

## 実際の作成例

★扉の例★

2 0

★論文本文の例★

2 1

★参考文献表の例★

2 2

## A. 準備から執筆まで——音楽研究入門

### I テーマの設定

#### ◎予備調査→テーマ設定

☆テーマを明確に

(何を調べたいか? 何が調べられるか? 何のために調べるか?)

☆テーマを設定するためにはある程度の予備知識、予備調査が必要

テーマを限定しすぎない(修正や方向転換の余地を残す)

広すぎるテーマは困りもの(結局、焦点が定まらなくなる)

次第にテーマを絞り、明確化する(焦点を絞ることが大切)

#### ◎仮説と検証

☆テーマの設定には見込み(仮説)が必要

本論では自分の立てた仮説を検討し、立証する

(しかし、自分の立てた仮説に拘泥し、惑わされてはいけない)

### II 基本概念の調査と理解(テーマ設定の前提・テーマ設定のための予備作業)

#### ◎自分が調べる対象に関する基本的概念を整理し、対象の概要を把握する

研究のための基本的資料を知る

事典のクロスレファレンスを駆使して、関連概念についても徹底する

資料リストの作成(p.3 III 3 参照)以前、あるいはリスト作成と並行して行う

### III 資料の収集

#### 1 資料の種類

##### ◎資料の質

☆一次資料 直接、研究対象に関わる、あるいは由来する資料 →これこそ重要

(一次資料に基づかない研究は、事実上、無意味)

二次資料 間接的な補助資料

##### ◎資料の形態

☆文献資料 事典、楽譜、単行本(研究書、論文集、啓蒙書、一般書)、  
雑誌論文(学術誌、専門誌、一般誌、大学紀要)、  
新聞記事、CD解説等

☆その他

電子資料 (pdf で入手可能な資料も多い)

映像・音響資料

図像資料 (実物を含む)

証言 (インタビューやアンケートによる調査)

(何が資料として重要かは研究対象・研究方法によって異なる)

## 2 資料の探し方

☆書店、図書館等で実物を探す (偶然の発見に委ねられ、網羅は困難)

☆[図書館 OPAC](#)、様々な文献目録、データベース等を調べる

[学術情報検索データベース](#) :

国立情報学研究所学術コンテンツ(書籍・雑誌検索 Webcat Plus; 論文検索+大学図書館所蔵図書検索 CiNii)、国立国会図書館サーチ(NDL Search)、世界図書館共同カタログ WorldCat などを検索可能 (詳細はリンク参照)

[東京音楽大学リポジトリ](#) : 大学紀要、博士学位論文などの pdf が入手可能

(修士論文 pdf は池袋・中目黒図書館内閲覧のみ)

☆事典項目、研究書、学術論文等の参考文献表を参照する

学術論文等の註に載せられた資料にも注意 (特に質の高い資料を得られる可能性)

☆インターネットからの情報は、情報源・典拠・信憑性が明確でない場合も多い

→ できるだけ情報の発信者や典拠を確認すること

発信者や典拠が不明のまま、インターネットから得た情報だけで論文を作成することは非常に危険

→ 学術論文と、匿名の SNS やブログに書かれた情報は分けて考えること

☆資料収集についての質問場所

[所属図書館情報サービス係 \(インフォメーションデスク\)](#) (池袋)

学修・研究サポーター (中目黒/池袋)

[オンラインフォーム一覧](#) (その他図書館員への相談・調査依頼など)

### 3 資料リストの作成

☆あらゆる可能性を考え、あらゆる手段を尽くしてできるだけ網羅的なリストを作成する

第1段階では入手の可能性、利用の可能性を考慮する必要はない

(多少でも関連があるものはリストアップ 外国語の文献も排除してはならない)

☆実際にどの資料を用いるかということは、リスト作成後に考える

☆資料リストは著者別、項目別等、何らかの方法で整理しておく

☆表計算ソフトを利用すると便利

入手の手掛かりとなる情報を書き込んでおく (情報源、所在等)

☆リストはこれ以降も随時 (論文完成まで) 補充していくことが必要

### 4 資料の入手と整理

#### ◎資料の収集

☆利用の可能性、必要性 (重要度) と入手の可能性から収集すべき資料を決定する  
購入できる資料は購入すべき

借り出した資料についても、著作権の許す範囲内でコピーを採っておくと便利

☆所属図書館以外に、他の図書館も利用することができる

(他大学の図書館、音楽図書館協議会、国会図書館、その他)

他大学への訪問調査: 要紹介状、所属図書館 (池袋) カウンターから申し込み

☆所属以外の図書館、国外の図書館/研究所については、文献複写依頼も可能

図書館 OPAC/インフォメーションデスクから申し込み

([OPACからの申し込みはこちらを参照](#))

所属図書館のインフォメーションデスクを最大限利用すること

#### ◎資料の整理

☆集めた資料はカード化、ノート化等によって、要約・整理しておく

オンライン資料の出典表記は URL・作曲家名・作品名だけでは不十分

(アップロードされた時点でページの抜けなどの作業ミスが想定されるため)

例 IMSLP で楽譜資料を参照した場合、元の紙媒体資料の識別番号を明記する

識別番号がない場合は出版情報、手稿譜であれば所蔵場所を明記する

☆PCで整理する方法

例 OPAC：資料内容の右上のアイコンでEvernote等に保存

EBSCO：資料右側のツールからGoogle Drive等を選択して保存

同ツールから引用を選択すると出典の情報をまとめて整理できる

☆自分の論考に有利な資料だけではなく、むしろ不利な資料に注目すべき

#### IV 調査と分析（研究対象、研究方法によっては分析が必要となる）

##### 1 現地調査（フィールド調査）

現場に直接入って資料を収集する（市販資料に頼った研究など無意味）

調査方法の確認

☆事前調査を徹底する（何が調べられるのか、何を調べなければならないのか）

☆クレジットの徹底（調査者、調査地、調査年月日、調査対象等の明記）

録音・録画の有効な利用（バックアップの必要性）

☆調査後にできるだけ早く整理をする（現場の記憶が生々しい内に）

☆被調査者への礼儀と著作権に注意（被調査者に調査目的、発表方法等を周知する）

##### 2 文書調査（アンケート等）

☆調査の客観性

調査のサンプル数（調査範囲：客観的結果を導き出せる対象とサンプル数）

☆設問の吟味

求める回答が得られる設問法（誘導尋問ではいけないが、予備調査の必要性）

整理方法（統計処理とPCの利用）

##### 3 文献調査（資料調査）

☆資料の信頼性の精査 文献の相互関係を吟味

要約とノート作り（資料の読み込み）

分析法の確定（どの資料を重視するか）

使用資料の明記

##### 4 楽曲分析

分析目的の確認と分析法の確定（分析目的にふさわしい分析方法）

使用楽譜の明記

## V 資料の読み込みと整理・執筆

### ◎論旨の決定

☆集めた資料に基づき、自分の論考の骨格を決定する

(章立て、説明の順序、論文中で用いる引用、実例・譜例の決定)

調べたこと、考えたことを全て書こうと思っはいけない

(論旨から外れる部分は割愛する勇気を持つ)

☆自分の言葉への翻訳

論旨は資料を深く検討し、自分の言葉にする (他人の論旨の丸写しはもっての外)

☆論理性、客観性に注意

客観性は判断の根拠・経路を示すことによって得られる (引用や資料の典拠の明示)

### ◎文章化の試み

☆研究・調査の進んでいる部分から随時文章化する

文章化することによって、調査の不足している箇所を割り出す

→再調査 →追加資料 →再文章化 →再々調査 →再々文章化 → 決定稿

中間発表、口頭発表によって自分の論理・調査の欠陥、弱点を知る

文書作成時は各章ごとにファイルを分けて、容量が重くなりすぎないように注意する。

また、こまめに (PC の外部に) バックアップ を取り、PC の不具合時にもデータを失わないように充分注意すること

## B. 執筆上の注意

### I 論文用紙

論文の記述は原則として PC を使い、プリントアウトは A4 用紙、字の大きさは 10～11 ポイント程度で、40 字×30 行（1200 字詰）、フォントは明朝体、マージンは左右 20mm 程度、上下 30mm 程度とする。楽譜・図表等については、必要に応じて他の用紙を用いてもよい。

### II 表紙

卒業論文の場合には教務課で準備する所定の表紙、修士論文・博士論文の場合には大学院事務室で準備する所定の表紙を付ける。

### III 提出原稿

卒業論文： オリジナルの原稿を一部提出する。

修士論文・博士論文： 提出部数については大学院事務室の指示に従うこと。

### IV 枚数

論文の枚数制限は論文の種類や専攻によって異なる場合があるので、教務課または大学院事務室で確認すること。ただし、その枚数には別添の楽譜・図表等は含まない。

### V 構成

次の順序に従って書式を整える

- |                    |  |
|--------------------|--|
| (1) 扉              | 上方中央に題目、下方中央に学籍番号と氏名を明記する                                    |
| (2) 目次             | 部・章・節の区分原則を明確にする<br>例 1： 第 1 部、第 1 章、第 1 節<br>例 2： I、1、(1)、① |
| (3) 凡例             | 文中の略語や記号の説明などを必要に応じてつける                                      |
| (4) 序論（または緒言・研究目的） | ここから（8）までページ番号を記入する  |
| (5) 本論             | 部・章・節の区切りは改ページ、1 行アケ、太字等で明確に示す。<br>段落の区切り目は改行し、一字下げて書き出す。    |

ページの最終行に章題等がくる場合は、改頁して次のページから新章とする。

- (6) 結論
- (7) あとがき                   必要に応じてつける
- (8) 参考文献表               必ずつけること
- (9) 付録                       必要に応じてつける

## VI 文字、各種の記号

数字の半角・全角の使い分け、大文字使用の原則、句読点の種類などは、論文の中で一貫した方法を用いるように気をつける。

送りがなは岩波書店の『国語辞典』第七版に準ずる。漢字の使用は動詞、名詞を主とし、副詞、接続詞等は原則としてかな書きとする。

( ) や 「 」 等の記号についても、論文を通して一貫した方法で使用する。

- ◎例えば、
- 「 」 直接引用や論文題名
  - 『 』 書名
  - 《 》 作品名
  - 〈 〉 副題、歌詞など
  - ( ) 補足的説明
  - [ ] 引用文中の補足的な説明

## VII 人名などの表記

以下、\*は全角アキ、\_は半角アキを表す。従って、  
\*1984\**Das\_deutsche\_Sololied* は、実際には  
1984 *Das deutsche Sololied* と印字されることになる。

◎人名（原則として研究者名は除く）

本文中の外国人名は原則としてカナ書きとし、初出の際に半角で姓名の原綴と生没年を示すこと。

例 ジュゼッペ・ヴェルディ\*Giuseppe\_Verdi\_(1813-1901)  
二回目からは略式でもよい。（例：ヴェルディ）

日本人の場合も、初出の際には生没年を示すことを原則とする。

**例** 山田耕筰（1886-1965）

◎音名、調名など

音名、調名、音高等の表記はどの国の方式に従ってもよいが、必ず統一して用いること。

◎術語

外国語の術語は、必要に応じて初出の際に原綴を示すこと。

◎漢数字

固有名詞、成句等に含まれる漢数字は、みだりにアラビア数字に書き換えない。

**例** 六段、三下がり、十戒、十二律

## VIII イタリック体の使い方

欧文の出版物においては、書名、雑誌名やラテン語の語句等を表記する際に、イタリック体を用いるのが通例となっている。以下にイタリック体の用法を示す。

- (1) 書名・雑誌名等（C. **参考文献の表記法**を参照のこと）
- (2) ラテン語の語句。ただし、省略形（*ibid=ibidem*「同じ場所に、同書に」）等を除く
- (3) ローマ字で転写されたアラビア語、中国語、日本語など、地の文以外の言語の語句

## IX 出典の明示

他人の学説、著書、楽譜、論文、講義内容、他人の協力を得たインタビュー、統計、翻訳などを直接あるいは間接に引用・参照する際には、必ず自説と区別した上、出典を明示すること。出典の表示は、（著者姓\_出版年：ページ番号）の書式で示すこととし、これを本文中、または文の末尾に付す。

### 例 原書の場合

ソーニャ・ゲルラッハはハイドンの交響曲の編成を……の三期に区分している  
(Gerlach\_1984 : 169-171)。

### 例 邦訳書の場合（カタカナによる著者姓\_邦訳書の出版年：ページ番号）

ワルター・ヴィオラはこの四つの時代の特徴を……という用語によって説明している  
(ヴィオラ\_1973 : 51-53)。

## X 他の研究との関連付け

### 1 引用

他の研究から文を引用したり図版資料を利用したりすることにより、自分の論考の裏付けを得、論旨を理解しやすくすることができる。ただし、引用ばかりではオリジナリティを疑われ、逆に引用が全くないと、オリジナリティを検証していないと見なされるため、論文中における引用の量には注意を要する。

引用する場合、引用と自説を明確に区別する。直接引用せず、言い回しを変えた場合でも、他人の説を記載する場合は出典を明記する必要がある。他の研究と自説の相違点を明示することによって、自説の独自性を明確にする事にも繋がる。

短い直接引用は、改行せずヒッカケ「 」を用いて記す。長い引用の場合には改行して引用文の前後を各1行あけ、タブ設定して通常よりやや狭い幅で記す。

#### 例1

…これについて、水野は「バッハにおける稀有の例」と指摘している（水野\_1997 : 242）。…

#### 例2

…これについて、水野は次のように論評している。

実際にこのような例は、バッハの初期の作品においてほとんど見られない。楽器編成の点からみても、真作性について慎重に問い直すべきである。（水野\_1997 : 243-244）

これに対して栗原は、次のように反論している。…

引用にあたっては、原則として一字も変えてはならない。変更を加える場合（アンダーラインや強調点を加える場合も含む）は、どのように変更したかについて断り書きを加える。一方、明らかな誤りや現代の用字用語法と異なるものをそのまま引用する場合には、（ママ）と記すことが望ましい。欧文ではラテン語で（sic）と記す。

外国語文献から引用する際には、できる限り原典から引用し、原語から自分で翻訳する。また孫引きの場合は、必ず「～を参照した」、「～による」、「～に基づく」などと補足し、参照元を明示する（翻訳を用いた場合も同じ）。

## 2 反論

他の論文等に反論を加える場合は、反論する相手、箇所、論拠等の論点を明確にする。単なる非難ではなく「批判」的な姿勢で、評価すべき所は正しく評価し、意見の異なる点を明確に論ずる。

## XI 注

単に引用文の出典を示すための注は設けず、上記 IX の方法で本文中に繰り返すこととする。よって、注は本文の論旨を補足・説明するために必要なものに限られる。

脚注または後注方式とし、脚注の場合はページごと、後注の場合には巻末に 1 から番号を付ける。ただし、章末注は避けることが望ましい。Word では、本文中の脚注を付けたい語句を選択し、「参考資料」タブから「脚注の挿入」を選択するとページ下部に脚注が挿入され、補足説明を書き込める。本文では、注番号が当該箇所の右肩上に書き込まれる。

### 例

**本文**

…ゲルラッハによるハイドンの交響曲の編成の区分は、以下の観点を根拠とするものである<sup>(1)</sup>。

**脚注または後注の箇所に内容を記す**

(1) 大川は、同様の観点によってモーツァルトの交響曲の編成の区分を試みたが…

## XII 参考文献表

本文中で引用・言及した文献、楽譜、AV 資料等については、すべて論文の最後の参考文献表に整理し、明示する。文献表における参考文献の表示の仕方は、**C. 参考文献の表記法**において詳述する。直接引用していなくとも、基本的資料、参照した資料についても列挙する。（どの範囲まで掲載するかは著者の裁量範囲）

参考文献表の記載順は、必ずあいうえお順、ABC 順等、ふさわしい整理法で整理する。（整理されていない文献表は、整理されていない思考の現れ）

同一著者が同一年に複数の論文を発表している場合には、年代に適宜 a, b, c, … を付し、これを区別する。

以下の例で、\*は全角アキ、\_は半角アキを表す。従って、  
\*1984\**Das\_deutsche\_Sololied* は、実際には  
1984 *Das deutsche Sololied* と印字されることになる。

## 参考文献表の原則 1

参考文献表では、以下の例のように 2 行目以降のインデントを下げて記載する。

### 例 (参考文献表の中に同一年に出された Sadie の事典項目が二つある場合)

Sadie, \_Stanley. \_1980a. \_“Wolfgang\_Amadeus\_Mozart.” \_Sadie, \_Stanley\_a. o. \_eds. \_*The  
\_New\_Grove\_Dictionary\_of\_Music\_and\_Musicians.* \_(London:\_Macmillan)\_vol. 1  
2, \_680-752.

-----. \_1980b. \_“Opera. \_IV\_Germany\_and\_Austria, \_3. \_Vienna:\_Gluck, \_Haydn,  
\_Mozart, \_Beethoven.” \_Sadie, \_Stanley\_a. o. \_eds. \_*The\_New\_Grove\_Dictionary\_  
\_of\_Music\_and\_Musicians.* \_(London:\_Macmillan)\_vol. 13, \_589-591.

## 原則 2 外国語文献のタイトル表記

英語 最初の文字、および全ての名詞、動詞、形容詞、副詞の頭文字は大文字として、  
その他（冠詞、等位接続詞、前置詞、ハイフンで連結された複合語の 2 番目以降  
の部分、普通は小文字である固有名詞の一部など）の頭文字は小文字にする。  
(見出し方式/headline style)

例 *Vincent\_van\_Gogh\_Exhibition.*  
*The\_Shortest\_History\_of\_Europe.*

仏語 タイトルの最初の文字、および固有名詞の頭文字は大文字として、その他は全て  
小文字にする。

例 *Le\_modèle\_et\_l'invention:\_Messiaen\_et\_la\_technique\_de\_l'emprunt.*

独語 タイトルの最初の文字、および全ての名詞の頭文字は大文字として、その他は全  
て小文字にする。

例 *Das\_deutsche\_Sololied\_im\_19.\_Jahrhundert;\_Untersuchungen\_zu\_Sprache\_und  
\_Musik.*

その他 当該言語の習慣に従う。

## C. 参考文献の表記法

論文の巻末に付ける参考文献表には、さまざまな種類の資料をABC順、あるいはあいうえお順等で列記することになる。どのような順序を採用するかについては、使用した参考資料の状況に応じて各自で方針を決定する。

参考資料は、たとえば文字資料、楽譜、画像資料、AV資料、インターネット、のように分類することができる。文献の表記法は資料の形態によって異なるため、次頁以下にその種類別に表記法を示すこととする。

参考文献表に参考資料を列挙する場合、資料の形態別に細分化して示す必要はない。各々の研究主題や参考資料の量に応じて、参考文献表が見やすいものとなるように、必要に応じて参考資料を分類・整理して示すこととする。

**例1** すべての資料を著者・作曲家のあいうえお順で記載

**例2** すべての資料を著者・作曲家のABC順で記載

以下の例で、\*は全角アキ、\_は半角アキを表す。従って、

\*1984\**Das\_deutsche\_Sololied* は、実際には  
1984 *Das deutsche Sololied* と印字されることになる。

## I 書籍

### (1) 洋書

#### 原則

著者姓, \_名. \_出版年 半角数字のみ, \_書名 イタリック体, \_ (出版地: \_出版社)

#### 例

Hoppin, \_Richard\_H. \_1978. *Medieval\_Music.* \_ (New\_York-London: \_W. W. Norton)

発行年が不明な場合は「n. d.」 (= no date) と記す。発行地が不明な場合は「n. p.」 (= no place) と記す。論文集などで編者名を記す際は、書名のあとに「----, \_ed.」 (= editor) あるいは「----, \_eds.」 (= editors; 複数の場合) を挿入する。

### (2) 和書

#### 原則

著者姓\*名\*出版年 (西暦) 『書名\*副題』 [\*シリーズ名巻号] (出版地: 出版社)

#### 例

渡辺\*護\*1987 『リヒャルト・ワーグナー\*激動の生涯』 (東京: 音楽之友社)

江戸時代以前の古和書を挙げる場合は、西暦の後に元号を併記する。

#### 例

高井\*伴寛\*1812 (文化9) 『撫箏雅譜大成抄』 (n. p.)

### (3) 翻訳書

原書を主に参照・引用したか、翻訳書を主に参照・引用したかによって書き方が異なるので、いくつかの例を示すこととする。

#### 原則1 (原書を主に参照・引用した場合)

原綴による著者姓, \_名 (カタカナによる著者姓, \_名) . \_原著の出版年. \_原題 イタリック体 体. \_ (出版地: \_出版社) \_ [ 『日本語の書名』 \* 翻訳者姓名 \* 訳 \* (翻訳書の出版地: 出版社, \_出版年) ]

#### 例

Dürr, \_Walther (デュル, \_ヴァルター) . \_1984. *Das\_deutsche\_Sololied\_im\_19.\_Jahrhundert;\_Untersuchungen\_zu\_Sprache\_und\_Musik.* \_ (Wilhelmshaven-Locarno-Amsterdam: \_Heinrichs-hoven's\_Verlag) \_ [ 『19世紀のドイツ・リート\*その詩と音楽』 \* 喜多尾道冬\*訳\* (東京: 音楽之友社, \_1987) ]

## 原則 2 (翻訳書を主に参照引用した場合)

カタカナによる著者姓, \_名 (原綴による著者姓, \_名) \* 翻訳書の出版年『日本語の書名』\* 翻訳者姓名 \* 訳 \* (翻訳書の出版地: 出版社) [原題 **イタリック体**, \_ (原著の出版地: \_出版社, \_原著の出版年)]

### 例

デュル, \_ヴァルター (Dürr, \_Walther) \* 1987 『19 世紀のドイツ・リート \* その詩と音楽』 \* 喜多尾道冬 \* 訳 \* (東京: 音楽之友社) [*Das\_deutsche\_Sololied\_im\_19.\_Jahrhundert;\_Untersuchungen\_zu\_Sprache\_und\_Musik.* \_ (Wilhelmshaven-Locarno-Amsterdam: \_Heinrichshoven's\_Verlag, \_1984)]

☆原書の 26 ページから引用する場合の出典表示は Dürr\_1984: 26 とし、翻訳書の 29 ページからの出典表示はデュル\_1987: 29 として示す。

☆原書の書誌情報を忘れずに記載する。

## 原則 3 (外国語から外国語への翻訳書で、主に翻訳書を参照・引用した場合)

原綴による著者姓, \_名. \_翻訳書の出版年. \_翻訳書の題名 **イタリック体**. \_翻訳者名\_ (翻訳書の出版地: \_出版社) [原題 **イタリック体**, \_ (原著の出版地: \_出版社, \_出版年)]

### 例

Mendelssohn-Bartholdy, \_Felix. \_1970. *Letters\_from\_Italy\_and\_Switzerland.* \_3rd.ed. \_translated\_by\_Lady\_Wallac, \_with\_a\_biographical\_notice\_by\_Julie\_de\_Marguerittes\_ (Freeport, \_NY: \_Books\_for\_Libraries\_Press) [*Reisebriefe\_aus\_d\_en\_Jahren\_1830\_bis\_1832.* \_ (Leipzig: \_Hermann\_Mendelssohn, \_1861)]

## (4) 編書

編纂者(ed.)が複数(eds.)の場合には、first editorのみを挙げ、他の編者名を a.o. (= and others)または et al (= et aliter)として省略することができる。

### 例

Greenberg, \_Noah\_a.o. \_eds. \_1975. *An\_Anthology\_of\_Early\_Renaissance\_Music.* \_ (New\_York: \_W.W.Norton)

### 例

永竹 \* 由幸 \* 監修 \* 1996 『ヴェルディ \* オテッロ』 \* 新潮オペラ CDブック 9 (東京: 新潮社)

## 例（編書の翻訳書）

Csampa, Attila; Holland, Dietmar eds. (チャンパイ, アッティラ; ホラント, ディー  
ートマル\*編) 1984. *Georges Bizet Carmen Texte, Materialien, Kommentar*  
e. *Rororo Opernbuch* (Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag) [『ビゼー\*カル  
メン』\*名作オペラボックス 8\*安藤元雄ほか\*訳\* (東京: 音楽之友社, 198  
8) ]

## II 論文

### (1) 雑誌に掲載された外国語論文

#### 原則

著者姓, 名. 出版年 数字のみ. “論文題目.” 掲載誌名 イタリック体 卷/号, 該当ページ  
数字のみ.

#### 例

Dorris, George. 1995. “Leo Staats at the Roxy, 1926-1928.” *Dance Research* 13/  
1, 84-99.

### (2) 論文集に掲載された外国語論文

#### 原則

著者姓, 名. 出版年 数字のみ. “論文題目.” 論文集の編纂者 姓, 名 ed(s). 論文集の題  
名 イタリック体 (出版地: 出版社) 該当ページ 数字のみ.

### 例（3箇所からの三つの出版社から出版）

Malins, Edward. 1968. “Yeats and Music.” Miller, Liam ed. *The Dolmen Press Yeats Centenary Papers*. (Dublin: The Dolmen Press; London: Oxford University Press; Chester Springs, PA: Dufour Editions) 481-508.

### (3) 雑誌に掲載された日本語論文

#### 原則

著者姓\*名\*出版年 数字のみ 「論文題目」 『掲載誌名』 卷/号, 該当ページ 数字のみ.

## 例

河合\*祥子\*1977「アウグスティヌスの『音楽論』— numerus を中心に」『音楽学』39/  
3, \_ 193-204.

### (4) 論文集に掲載された日本語論文

## 例

村田\*千尋\*2001「18 世紀末ドイツ文芸誌における詩と音楽について」\*徳丸吉彦他\*  
編\*『モーツァルティアーナ\*海老澤敏先生古希記念論文集』(東京:東京書籍)  
\_300-308.

## III 事典項目

### (1) 外国語事典

## 原則

著者姓, \_名. \_出版年 $\boxed{\text{数字のみ}}$ . \_“項目名.” \_事典編纂者姓, \_名\_ed(s). \_事典名 $\boxed{\text{イタリック}}$   
 $\boxed{\text{体}}$ . \_ (出版地: \_出版社) \_巻, \_該当ページ $\boxed{\text{数字のみ}}$ .

## 例

Forbes, \_Elliot. \_1980. \_ “Schindler, \_Anton\_Felix.” \_Sadie, \_Stanley\_a. o. \_eds. \_*The*  
*New\_Grove\_Dictionary\_of\_Music\_and\_Musicians.* \_ (London: \_Macmillan) \_vol. 16,  
\_652.

Scherliess, \_Volker;\_Forchert, \_Arno. \_1994. \_ “Konzert.” \_Finscher, \_Ludwig\_ed. \_*Die*  
*Musik\_in\_Geschichte\_und\_Gegenwart.* \_ (Kassel: \_Bärenreiter) vol. 5, \_628-686.

### (2) 日本語事典

## 原則

著者姓\*名\*出版年 $\boxed{\text{数字のみ}}$ 「項目名」\*事典編纂者姓名\*編\*『事典名』(出版地:出  
版社) \_巻, \_該当ページ $\boxed{\text{数字のみ}}$ .

## 例

岸边\*成雄\*1982「京劇」\*下中邦彦\*編\*『音楽大事典』(東京:平凡社) \_第2巻, \_7  
01.

☆項目の執筆者がわからない場合は「著者不明」とする。

以下、\*は全角アキ、\_は半角アキを表す。従って、

\*1984\**Das deutsche Sololied* は、実際には  
1984 *Das deutsche Sololied* と印字されることになる。

#### IV 楽譜

##### (1) 独立して出版されている楽譜

書籍（上記 I）に準ずるものとして表記する。

##### 例

Haydn, \_Joseph. \_1982. *Lieder. \_Gesang\_und\_Klavier. \_Helms, \_Marianne\_ed. \_*(München: \_  
G. Henle)

##### 例

ベルリオーズ, \_エクトール\*1959『幻想交響曲\*作品 14』（東京：全音楽譜出版社）

##### (2) 全集の一部

雑誌や論文集に含まれる一論文（上記 II）に準ずるものとして表記する。

##### 例

Mozart, \_Wolfgang\_Amadeus. \_1957. \_ “Symphony\_in\_C\_major. \_K. 551. ” \_Landon, \_H. C. Rob  
bins\_ed. *Wolfgang\_Amadeus\_Mozart. \_Neue\_Ausgabe\_sämtlicher\_Werke. \_*(Kasse  
1: \_Bären-reiter)\_IV/11/9. \_187-266.

##### (3) 楽譜の解説

##### 例

Köhler, \_Hans\_Joachim. \_1986. \_ “Nachwort. ” \_Schumann, \_Robert\_*Dichterliebe. \_*(Frank  
furt-Leipzig-London-New\_York: \_C. F. Peters)\_37-41.

## V AV 資料

### (1) CD・DVD 等

書籍（上記 I）に準ずるものとして表記する。発売年がわからないものについて代わりに録音年を示す場合には、そのことを明記する。

#### 原則

作曲者姓、\_名、\_発売年、\_CD タイトル イタリック体、\_演奏者名、\_（レーベル名\_記号番号）

☆日本盤の場合にはタイトルを『 』で示す。

#### 例

Senfl, \_Ludwig, \_1991, \_*Deutsche Lieder*, \_Ricercare-Ensemble\_für\_alte\_Musik, \_(Reflexe\_CDM\_7\_63443\_2)

#### 例

イザーク, \_ハインリヒ \*1984 『インスブルックよ、さらば』 \*ロンドン中世アンサンブル  
\*（ポリドール\_POCL\_3168）

#### 例（さまざまな作曲家／演奏家の録音を含むシリーズの 1 枚）

海老澤 \* 敏 \* 総監修 \* 2004 「日本人音楽家国内録音(1)」 『SP レコード復刻 CD 集日本名盤復刻選集 I』 （ロームミュージックファンデーション\_ANOC\_6056a）

### (2) AV 資料の解説

論文（上記 II）に準ずるものとして表記する。

#### 例

Pères, \_Marcel, \_1986, \_“L’interprétation\_du\_chant\_Grégorien\_à\_la\_fin\_du\_moyen-âge.” \_Josquin\_Desprez, \_*Missa\_pange\_lingua*, \_(harmonia\_mundi\_FRANCE\_901239)\_8-9.

#### 例

永田 \* 仁 \* 1991 「音楽史におけるルネサンスと循環ミサ曲」\_デュファイ, \_ギョーム『ス・ラ・ファセ・パル』 （東芝 EMI\_TOCE\_6194）\_4-7.

## VI インターネット

当該ページを「          」で示し、そのページを含むホームページ全体の名称が示せる場合には『          』で示すこととする。

作成日・更新日がわからない場合、年代の欄には n. d. と記す。そのページを参照した年月を参考として付記してもよい。

### 例（出典が明らかな場合）

松本\*汎人\*2003「人形運んだ天洋丸」（『長崎新聞』2003年1月1日）

<http://www.nagasaki-np.co.jp/press/tamako/tokusyu/08.html>

### 例（著者が明瞭で、年代が推測できる場合）

東京大学附属図書館\*[2003]「博覧会関係資料（常設展 2003年4月～6月）」

[http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/josetsu/2003\\_04-06/](http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/josetsu/2003_04-06/)

### 例（著者が本名でなく、作成日が不明の場合）

Bee-Yan' g. \_n. d. \_「第三章\*お伽歌劇とは何だったのか」（『昔のレコードを聴こう!』HP内）

<http://www.sound78rpm.jp/otogikageki02.html>

### 例（著者と年代がわからない場合）

著者不明\*n. d. \_「東洋汽船北米航路汽船発着表」（『20世紀時刻表歴史館』HP内）

[http://www.tt-museum.jp/taiyo\\_0030\\_tyk1924.html](http://www.tt-museum.jp/taiyo_0030_tyk1924.html)（2006年6月参照）

### 例（事典を参照した場合）

Orledge, \_Robert. \_2020. \_ “Satie, \_Erik.” (*The\_New\_Grove\_Dictionary\_of\_Music\_and\_Musicians. \_Oxford\_music\_online\_revised\_by\_Potter, \_Caroline*)

<https://doi.org/10.1093/gmo/9781561592630.article.40105>（2023年5月参照）

実際の作成例

★扉の例★

令和 6 年度修士論文

日本の音楽教育とトニック・ソルファ

— パットン夫人が果たした役割 —

学籍番号

東音 まりあ

## ★論文本文の例★

音楽教育家エミリー・ソフィア・パットン Emily Sophia Patton (1831-1912)は1831年にロンドンで生まれ、12歳の時にニュージーランドに移住、2年後にオーストラリアへと移った。22歳で結婚するが5年後に夫と死別、2年ほど演劇活動をしたのち30歳で再婚して一男一女を得た (Forde 1912; Williams 1975: 59-60; Stevens 2000: 41)。子供に手がかからなくなった1870年代の半ばから音楽を教え始めたと思われる。その経験に基づき、1880年には著書 *Harmony simplified for popular use: an original method of applying the first principles of harmony to the object of accompanying the voice on the pianoforte* (オーストラリア国立図書館所蔵) を出版した。この本は、声楽を伴奏する際にピアノで簡単に和声づけする独自の方法を示したもので、トニック・サブドミナント・ドミナントの和声機能をそれぞれ黄・青・赤の色で表している点が特徴である (Stevens 2000: 41-42)。

次いでサムエル・マクバーニー Samuel McBurney (1847-1909) にトニック・ソルファの指導を受けた (Stevens 2000: 43)。**例1**に示したとおり、トニック・ソルファは五線譜とは異なり、文字あるいは手の形(ハンドサイン)によって音を表す記譜・読譜の方法である。ドをd、レをr、ミをm、ファをf、ソをs、ラをl、シをt、あるいはそれぞれを独自の手の形で表す。移動ド唱法によりすべてが階名で表され、音名を用いないために、階名と音名の混同という問題が生じない。調性の音楽を表すのに有効であり、また特に賛美歌や学校唱歌など簡易な声楽曲の指導をするのに効果的な方法である。生徒たちは、drmfsltのアルファベット、あるいは先生が示すハンドサインを見るだけで容易に歌うことができ、音部記号や調号・臨時記号によって何通りもの読み方が可能な五線譜の煩雑さから解放されることになる(東川 1983: 167-230)。[中略]

1889年8月、58歳のパットンは、一人残された娘グwendoline とともに新天地日本に移住した。神戸を経由して横浜の山手63番に居を定めると、すでに9月7日に英字紙にピアノ、和声、音楽理論、分析、トニック・ソルファとダンスの教授広告を掲載している<sup>(1)</sup> (*Japan Gazette* 1889/9/14: 4; 1889/9/23: 3; 1889/10/5: 4; 1889/10/18: 3)。

---

(1) オーストラリア国立図書館所蔵ハロルド・S・ウィリアムズ資料には、日本に滞在したのちオーストラリアに渡ったディクソン牧師 [W.G.Dixon] が、文部大臣森有礼宛に推薦状を書き、パットンを東京音楽学校に紹介してもらうことになっていたが、すでに森が暗殺されていたために実現できなかったという情報が記されている。ただし、その経緯を示す資料は現存していない。

## ★参考文献表の例★

### 参考文献

アルゲリッチ, マルタ 2015 『私こそ、音楽』 (ポニーキャニオン PCBE54599)

Forde, F. F. (“Old Chum”). 1912. “Early Melbourne.” (No.132) *Truth* 1912/3/30, Melbourne.

稲村 なおこ 2015 『きれいにかうたいましょう ソルフェージュ1』 (フォンテック EF CD4156/7)

Rainbow, Bernarr. 1994. 「トニック・ソルファ法」 [Tonic Sol-fa] Sadie, Stanley a.o. eds. 『ニューグローヴ世界音楽大事典』 (東京：講談社) 第11巻, 513-516.

----- . 2001. “Tonic Sol-fa.” Sadie, Stanley ed. *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2<sup>nd</sup> ed. (New York: Grove) vol.25, 603-607.

佐々木 敏郎 1993 「ネーサン・ブラウンの生涯と宣教活動 (1) —その家系と家族—」 『関東学院教養論集』 2, 45-70.

Stevens, Robins S. 2000. “Emily Patton: An Australian Pioneer of Tonic Sol-fa in Japan.” *Research Studies in Music Education*. 14, 40-49.

----- . 2011. “The Curwen Method (Tonic Sol-fa).” *Australian Music Education Information and Resources*.

<http://www.australian-music-ed.info/Curwen/Hist0%27view.html>

(2015年12月参照)

鈴木 米次郎 1892 『簡易唱歌法』 (東京：共益商社)

----- . 1990 「新式唱歌 一名トニックソルファー唱歌集」 江崎公子 編 『音楽基礎研究文献集』 第1巻 (東京：大空社)

東川 清一 1983『退け、暗き影「固定ド」よ！——ソルミゼーション研究』（東京：音楽之友社）

Williams, Harold S. 1975. “Two Remarkable Australians of Old Yokohama.” *The Transactions of the Asiatic Society of Japan*. ser.3, vol.12, 51-69.